

## 大阪法務局長賞

### 「目で見る。」

富田林市立第二中学校 一年 濱野 はまの 茜理 せり

私のお姉ちゃんには目に「障害」があります。私が物心ついた時にはお姉ちゃんの目は悪化していました。お姉ちゃんは小学二年生から目が悪くなっていました。そしてついに大学生になるころには、右目はほぼ視力がなく、左目は光しか感じられない状態になりました。コンタクトやめがねをかけても効果はあまりありませんでした。始めのころは初めて行く場所には「白杖」という目の障がい者用の杖を持って歩いたり、必ずつきそいが必要でした。でも見えなくなつて5年ほど過ぎた今は白杖を使う回数も減り、つきそいがいなくても歩けるようになりました。

しかしお姉ちゃんにはこえて行かなければいけない山がまだたくさんありました。一つ目の壁は「駅」です。文字が見えないので、自分がどの電車に乗れば良いのか分からないのです。現在は点字なども使われていますが、お姉ちゃんは点字を習っていないので読めません。駅員さんに聞いても「この緑の線の通り行くと〇〇線の電車に乗れます。」分かりやすい説明ですが、お姉ちゃんには緑の線も見えません。「どこに行けば？」ただの駅でもお姉ちゃんにとっては「迷路」です。

二つ目の壁は「絵を書く事」です。特に風景画です。木を書くとします。健常者は葉を一枚一枚細かく書く事が出来ます。しかし姉は目がほぼ見えないので葉を一枚一枚認識する事が出来ません。「絵を書く」という事は、私達の想像以上に難しい事なのです。

姉はこの二つ以外にもまだまだ難しい事がいっぱいあります。でも姉が一番怖いのは、「健常者からの目」

です。姉は白杖をついて街を歩きます。人混みの中などでどうしても白杖が健常者の足に当たってしまっています。すると舌打ちやにらむなど、ひどいあつかいをされます。なので姉はあまり白杖を使いたくないと話していました。他には時計が見えないので、時間を聞くと、

「えっ？あそこの時計も見えないの？」

とつめたい態度をとられる事もよくあります。

「なりたくてこうなったわけじゃないのに。」

とすごく悲しくなるのです。

今の社会では障がい者が暮らしやすい社会とは言えません。もちろん設備が不十分という事もありますが、一番の理由が「障がい者に対する健常者の気持ち」です。姉のような人達を健常者と同じように優しく接してくれる人もいます。けれど困っているのに見てみぬふりや、「障がい者だから。」といって差別する人がこの世界にはいっぱいいます。

考えてみて下さい。自分の体のどこかに障害があるとします。自分が困っているのに誰も助けてくれない。手を貸してくれない。こんな事をされるとすごく辛いでしょう。それを姉のような人達は何回も経験しています。今まで当たり前のようにしていた「見る」という事が出来なくなったらとても怖いことです。それは姉も同じです。

そんな姉には夢があります。それは東京パラリンピックの競技。「ボッチャ」の審査員になる事です。審査員になれるのは世界中で八人です。お姉ちゃんは目が見えないので、人一倍努力が必要です。なので今はよく東京や千葉の大会などに出張に行き、実際に審判をやっています。次はスウェーデンやアメリカなどの海外でも実際に審判をするそうです。しかし、審査員はあくまで「ボランティア」。収入は無く、出されるのは交通費ぐらいです。

なのになぞお姉ちゃんは「パラリンピックの審査員」という夢を追い続けるのでしょうか？それはこの社会

の弱者（障がい者）を支えたいから。社会では障がい者より健常者の方が強いです。出来る事も障がい者より何倍も多いです。しかし努力のすごさは障がい者の方がすごい!!と言いつけるでしょう。できない事が多い分、がんばりの大きさはすごいです。姉はそんな人一倍努力をしてきた人達を応援したいのです。

この夢を叶えるためにがんばる姉を私達家族でずっと支えています。私は姉を近くで見ているとすごくかっこいいと思います。夢を追ってがんばる姿。私は自分の姉をすごく尊敬しています。

姉のような障がい者でも夢を叶えるために難しい事に挑戦したり、たくさん努力をしている人が世界にたくさんいます。みなさんにはそんな人達がいる事を決して忘れないでほしいです。そしてそんな人達に向かって笑顔で「がんばれ!!」や「大丈夫?」など応援や手助けをしてあげてください。人は応援をされると何倍も力が増します。それは「健常者」も「障がい者」も同じなのです。